



ocumentary

日米半導体協定の終結交渉 (第2回)

# 昨日の友は今日の敵

1986年7月に締結された日米半導体協定は、1996年に有効期限の最終年を迎えた。これを受けて、協定失効後の枠組みを定めるための交渉が同年2月にスタート。牧本次生は、日本側交渉団の一員として議論のテーブルに着いた。互いの利害をかけた議論が平行線をたどったまま、交渉終了のタイムリミットが迫った7月。思わぬ事態が牧本を襲う――。



1996年2月にハワイ・ホノルルで開催された第1回交渉における日米交渉団メンバー。左端が松下電器産業(現パナソニック)の副社長を務めていた豊永恵哉氏、中央が牧本氏、右端は当時ソニー会長だった故・大賀典雄氏。

(写真：加藤 康(p.85、p.86の左下、p.87))

日米半導体協定の最終年に当たる1996年、日本の半導体市場における外国製半導体のシェアは25～30%にまで高まっていた。協定の目標値である20%を大きく上回る数字だ。

当時、日本の半導体産業は1980年代の勢いを完全に失っていた。1993年には世界首位の座を米国に譲り、韓国勢の足音も次第に大きくなっていった。世界市場で、日本の半導体メーカーの存在感は薄れつつあった。

## 交渉が民間に委ねられる

1996年1月に橋本龍太郎内閣が誕生する頃には、日米政府は協定失効後に向けた議論を本格化する必要に迫られていた。

日米半導体協定の締結時、交渉を主導したのは日米の政府だった。これに対し、1996年の交渉では政府が先行して交渉を進めながらも、主導権は民間に移った。両国の産業界代表が具体的な枠組みを決め、両国政府が追認するという手続きが取られることになったのだ。

産業界代表として交渉に当たるのは、EIAJ（日本電子機械工業会、現JEITA）とSIA（米半導体工業会）である。交渉のタイムリミットは、橋本首相と米国のBill Clinton大統領の会談の場で、1996年7月31日に定められた。

交渉に参加するEIAJ側のメンバーとして選ばれたのは3人。当時、ソニー会長でEIAJ会長でもあった大

賀典雄をリーダーに、UCOM（半導体ユーザ協議会）<sup>注1)</sup>代表で松下電器産業（現パナソニック）副社長だった豊永恵哉、EIAJの電子デバイス委員長を務めていた牧本、という顔ぶれだった。

SIA側は、SIA会長で米Texas Instruments (TI) 社 Vice ChairmanだったPat Weber（パット・ウェーバ）をリーダーとし、米LSI Logic社（現LSI社）ChairmanのWilfred Corrigan（ウィルフ・コリガン）と、米Motorola社（当時）の半導体部門を率いていたTommy George（トミー・ジョージ）が脇を固めた。

第1回の交渉日は1996年2月23日、開催地は米国ハワイのホノルル（オアフ島）と決まった。オアフ島は、日本が1941年12月8日にPearl Harbor（真珠湾）を奇襲して太平洋戦争へ突入した、両国にとって因縁の地だ。

## 気心の知れた仲

「やあ、パット。久しぶり」

「マキモトさん、相変わらずお元気そうですね」

「それにしても、こんなところで再会するとはねえ…」

2月23日の“初顔合わせ”は、和やかな雰囲気が始まった。実は、両国の交渉団メンバーは、互いに初対面ではなく旧知の仲だったのだ。



交渉の2年前の1994年。日立は、TI社とDRAMの合弁会社TwinStar Semiconductor社を設立した。そのために尽力したのが、牧本とパット・ウェーバだった。二人は気心の知れた友人だったのである。二人の親密さは、後に交渉の最終局面でも重要な役割を果たす。

ソニーの大賀とLSI社のコリガンも互いをよく知っていた。1994年にソニー・コンピュータエンタテインメント（SCE）が発売したゲーム機「プレイステーション（PlayStation）」のマイクロプロセッサで、ソニーとLSI社が協力関係にあったからだ。

大賀は、パットとも仲が良かった。TI社が日本進出に当たってソニーと合弁会社を設立するなど、両社の関係が深かったことが背景にある。

しばらくリラックスした雰囲気雑談を交わした後、交渉は本題に入る。主眼は、協定失効後の枠組みについてどのような展望を持っているかを確認し合うことだった。

注1) UCOMは、日米半導体協定に従い、外国製半導体の採用を促進する役割を果たした。

日本側の主張は明確だった。「協定をきれいさっぱり終わらせる」(牧本)ことだ。日本側に見れば、協定締結以降の10年間で「米国側の目的はすべて達成されていた」(牧本)との思いが強い。日本の半導体市場は広く開放され、日本メーカーによるダンピングも起こっていなかった。一方の米国側が、協定失効後も何らかの形でその趣旨を維持しようと考えたのは、協定によって米国が受けた恩恵の大きさを考えれば当然だった。「協定は、日米双方にとって意義深いものだった。このまま解消してしまえば、両国の半導体貿易は再び不均衡な状態に後戻りしかねない。ぜひとも趣旨を維持すべきだ」

フットボール選手と見まがう巨体を揺らして主張するパット・ウェーバの目は笑っていない。「厳しい戦いになるな…」。牧本は不安を覚えた。

この交渉では具体的な議論には踏み込まず、2カ月後の4月26日にハワイ島で第2回交渉を行うことを確認して幕を閉じた。



米国側交渉団メンバー。左から順に、米Motorola社(当時)のTommy George氏、TI社(同)のPat Weber氏、LSI Logic社(同)のWilfred Corrigan氏。右端は、第4回の交渉から参加したMicron Technology社のSteven Appleton氏。



### 「ゴルフクラブ御一行様」

この時期、日米半導体協定の行方は、日本のマス・メディアにとっても一大関心事だった。水面下で進められている交渉の行方を探ろうと、躍起になっていた。牧本が仕事を終えて帰宅すると、門の前に新聞記者が待ち構えている日もあったほどだ。

メディアの動きを気にした牧本らは、第2回交渉でハワイ島のホテルにチェックインするに当たって、“偽装工作”を行う。個人名に偽名を使い、団体名は「●●ゴルフクラブ」としたのである。

交渉に臨む前の晩のこと。ちょっとした用事でホテルの部屋を出た大

賀は、ドアの鍵を部屋に置き忘れたことに気付く。あわてて引き返したが、オートロック式のドアは固く閉まっている。仕方なく、スペア・キーを取りにフロントへ向かう。フロント係に声を掛けた瞬

間、大賀は頭が真っ白になるのを感じた。チェックインの際に申告した自分の偽名を忘れたのだ。

「Can I have your name, Sir ?」

「…」

「Your name, please.」

「…」

不審の目を向けるフロント係。大賀の窮地を救ったのは、フロントの前を偶然通りがかった部下だった。

「おい、助けてくれ。俺は何て名前だった?」

### 政府関与が焦点に

4月26日午前には幕を開けた第2回交渉では、日米が互いの主張を具体的に提示した。

日本側が訴えたのは、外国製半導体のシェア・モニターや公正市場価格(FMV)の設定といった、日米の「政府関与をやめさせること」(牧本)だった。市場原理にゆだねるのがフェアだ、という考え方である。これに対し、米国側は「政府関与の維持は絶対に譲れない」と強く求めた。

互いに相いれない主張の中、LSI

社のコリガンが語気を荒げる。

「政府関与を認めないなら、話しても無駄だ。交渉を打ち切ろう」

気まずい雰囲気のまま、昼食の時間を迎えた。大賀はパットに声を掛け、二人だけで話す場を設けた。

「パット、今日は論点を出し尽くすことに専念しよう。着地点を探るのは次回以降でいい」

こうして、午後は政府関与の問題を脇に置いて議論を進めることになった。だが、双方のわだかまりは残り、議論は終始かみ合わずに終わった。結局、政府関与に関する意見の対立は、交渉の最終段階まで続く。

## 大賀から突然の電話

続く第3回交渉は、2カ月後の6月24日に電話会議で行われた。この場で日本側は、協定失効後に「世界半導体会議(World Semiconductor Council:WSC)」を設立することを提案した。日米間で起こったような摩擦を避けるために、各国の相互理解を深めるためのグローバルな議論の場を作ろう、という趣旨である。

背景にあったのは、日米半導体協定の締結以後、劣勢に立たされ続けてきた「日米2極間(bilateral)の関係から何とかして逃れたい」(牧本)という日本側の思いだ。他国を巻き込む多極的(multilateral)な議論の場を設けることで、「日本が米国から“一方的に攻撃される”事態を解消しようとした」(牧本)。



交渉の前年の1995年には、自由貿易を促進する国際機関として世界貿易機関(World Trade Organization:WTO)が創設されていた。こうした国際的な枠組みにならい、国家間貿易に関しては多極間で議論するのが筋だ、というのが日本側の論法だった。

日本側の意図を見抜いた米国側は、この提案をたやすく受け入れようとはしない。2極間の議論の場を維持することを主張して譲らなかった。

こうして第3回交渉も、平行線をたどったまま終了を迎える。

「政府関与」と「多極的な議論の場の設立」という二つの論点の着地点を見いだすことが、交渉を成功に導くための最大のハードルになる。交渉を終えた時点で、牧本はそう確信していた。

そして、7月31日のタイムリミットが

間近に迫る7月20日に第4回交渉が行われることになった。開催地はカナダのバンクーバーである。

次の交渉を1週間後に控えた7月半ば——。牧本は大賀から突然の電話を受け取る。受話器の向こうで大賀が発した言葉に、耳を疑った。

「牧本さん、すまない。体調を崩して入院中で、20日の交渉には出られそうにないんだ。この先、日本側のリーダーをあなたに任せたい」

これまでの交渉の中心人物だった大賀の代理を1週間で見つけられる見込みなど、あるはずもない。

「分かりました。どこまでやれるか分かりませんが、お受けします」

こう答えるほかに道はなかった。

＝敬称略

——次回に続く——

(大下 淳一)■